

湯祈祷文化を巡って — その文化と人々との関わり —

〈日本文学科四年〉 岩坂 恵子・大場 愛・岡 加奈子

熊淵 沙耶

○チーム行程

・十六日

十時 湯神社訪問（湯神社宮司、鳥谷さんご協力の元、湯祈祷についての取材を行う）

十一時 伊佐爾波神社参拝

十三時 湯築城公園散策

十四時 道後温泉旅館協同組合訪問（後藤雅俊事務局
長ご協力の元、道後温泉まつりについてお話を伺う）

十五時 商店街散策

十九時 道後温泉

・十七日（松山市内自由散策）
九時半 坊っちゃん列車移動

十時 松山城↓マドンナバス↓萬翠荘見学↓愛媛県庁見学

十四時 松山市駅周辺散策

道後温泉のお湯は、中央構造線に沿って地下の岩の割れ目から湧き出しているという特質から、歴史上地震によって度々湧出が停止する事態に見舞われていた。そのたびに神仏に祈願したり、神楽を奉納したりということが繰り返されてきたようである。

宝永四年に湯の湧出が止まった際、藩主・町民総出で神社に祈祷したことが湯祈祷の始まりとされている。温泉で生計を立てていた地域にとって、お湯が出ないのは死活問題であった為、温泉の神を祀る湯神社を通じ、湧出祈願したところ、お湯が開始した。この再湧出した一月二九

日を記念し、毎年湯祈禱が行われるようになった。明治三六年には、安政地震復興五〇年記念大祭が十日間開催されたことから祭りが毎年恒例化した。これが現在湯祈禱の後に行われている温泉まつりの原型となっている。

【湯祈禱】

①泉祭…道後温泉本館屋上に設けられた小祠の前で神事を行う。

②祈禱祭…玉の石の前に祭壇を設け神事を行う。各旅館に分湯された初湯を竹筒の桶に汲み奉納し湯祈禱祭を執り行い、巫女が鈴神楽を奉納する。

③献湯祭…玉の石前からダイバと神職、湯釜をかたどった神輿を先頭に、それぞれ青竹の湯桶を持って商店街を行列、湯神社拝殿に昇殿し、青竹の湯桶を神前にお供えする。この奉納したお湯はその後各旅館の温泉に戻すことで、温泉の繁栄と健康を祈願する。

※なお湯神社の管轄は以上の神事のみとなっており、「道後温泉まつり」全体を管轄・主催しているのは道後温泉旅館協同組合をはじめとする温泉関係者となっている。

【現在における湯祈禱】

当初の湯祈禱は、停止した温泉の再湧出を神仏に祈願

することを目的としたものであったが、近代に入り温泉まつりの中心となる旅館・商店街関係者からの要請により観光を目的とし「道後温泉まつり」の行事の一環として取り込まれる形で現在に至る。そのため現在の湯祈禱は信仰としての意味合いは弱くなっているが、昔から地域の生活の基盤となっている「温泉」にまつわる祭事として、信仰から観光へと移り変わりながらも地域を支え続けていると言える。

○主要参考文献

- ・『道後温泉』（『道後温泉』篇集委員会編／松山市出版／一九七四年）
- ・湯神社HP <http://yuumydn.jp/>
- ・道後温泉旅館協同組合HP <http://www.dogo.or.jp/>
- ・データベース「えひめの記憶」（愛媛県生涯学習センターHP <http://www.dogo.or.jp/>）

い
い
ゆ
だ
ね

い
い
と
こ

伊
予
の
湯

